

# 準拠集団と道德性の発達

(第3報告)

交友選択の範囲及び対人態度と準拠人・道德判断の類似性

向井敦子・古畑和孝

**問題：**本研究は道德性発達の心理学的基礎に関する研究（代表研究者，沢田慶輔東京大学名誉教授）のうち，準拠集団との関連から行なってきた一連の研究の一部である。第1報告（古畑・向井，1975）では主として準拠人の特性に視点をおき，第2報告（古畑・向井・明田，1977）では，道德性テスト作成および施行結果をいくつかの点から分析することに視点をおいてきた。第3報告である本研究は，友人に焦点をあてて，友人の選択範囲の分析と，交友選択を生じさせるもととなる好意性と関連をもつと考えられる準拠人及び道德性の類似性に関して検討する。

すでに第1報告でも述べたように，どういう人が準拠人として選択されているかを年齢別に検討してみると，親や家族への準拠型から友人型へ移行する傾向が示されてきた。しかしそこで示された友人はどのような範囲から選択された友人であるのか，また，どのような場面でも同じ友人が選択されるのかという点に関して疑問が生じてきた。後者に関しては鈴木(1969)がまとめているように，選択する場面が異なると交友関係も変化し選択理由が異なってくることが多くの研究で示されているが，仲よしや遊び友達，学習仲間といった比較的具体的な場面が扱われている反面，自己の行動の関係枠としての準拠人という一般性は乏しいように思われる。また，そのように選択された人が果して抽象的場面でも準拠人として選択されるのか，

---

本研究は，故・発智弘雄氏（当時埼玉県入間市教育委員会教育次長）の絶大なる御協力のもとに行なわれた。氏の御冥福を心からお祈り申し上げます。

なお本稿は，向井が執筆の責任を負うものである。

同級生以外にも準拠人としてこの友人は選択されるのかといった点については明らかではない。そこで(その1)では、抽象的場面と具体的場面を設定して交友選択の範囲を分析する(古畑・深見・播磨, 1972)。それによって好意性(attraction)の生じる範囲を検討することにより、好意性を支える要因としての類似性(similarity)の問題を探る手がかりとする。

(その2)では、準拠人の類似性と道徳判断の類似性の面から好意性と類似性の関係を検討する(向井・古畑・明田, 1974)。

### (その1) 交友選択の範囲について

**目的:** 準拠人としての友人がどの範囲から選択されるかを知るために、ニア・ソシオメトリックテストを施行する。その際、選択・排斥の範囲を同一学級内に限定せずに施行して、学級内友人の選択率および学級外友人の分類を行なって、小学4年と中学1年における交友範囲を分析する。また、特定集団内の社会測定的地位(sociometric status)の高い者は、その集団に対する帰属の度合が高まることが予想されるので(Newcomb, Turner, & Converse, 1965)、社会測定的地位の高い者の方が友人に準拠することが多いと予想される。この点から社会測定的地位と準拠型との関連を検討する。

#### 方法:

- 1) 調査対象 埼玉県I市内小学4年250名, 中学1年151名の計401名
- 2) 調査時 1971年2月 各担任を通して施行
- 3) 調査の内容 以下に示すような日常出会いやすいと思われる選択場面4つと排斥場面1つについて、選択排斥の範囲を学級内に限定せずに3名の氏名を記入させるニア・ソシオメトリックテストを行なった。学級外の友人の場合は、学校・学年・組を記入させた。同時に10場面についての準拠対象の調査も行ない準拠型の資料とした(準拠対象の調査は、

古畑・向井（1975）と同一の資料である。）

準拠対象としての友人の選択排斥に関する調査は以下の通りである。

次に書いてある短い文章をよく読んで、いちばんぴったりとする友だちの名前を3人ずつ書いてください。また、その理由(わけ)も書いてください。同じ組の友だちでも、ちがう組の友だちでも、あるいは学年がちがっても、または学校がちがってもかまいません。（なお、ちがう学校の友達の場合にはその学校名も書き入れてください。）ちがう問いに対してなら、同じ人を2度以上書いてもかまいません。思ったとおりに書いてください。

1) 何でもうちあけて相談できる友だちは……

氏 名	学年・組	学校(ちがう学校の時)	理 由

2) 勉強やテストのわからないことなどを、お互いに相談する友だちは…

3) いっしょに遊んだり運動したりする友だちは……

4) 自分の考えやしたいこととよくにている友だちは……

5) いっしょに話をしたり、遊んだりしたくない友だちは……

**結果：**

**1. 同一学級内友人の選択率の比較**

まず同一学級内の友人が準拠人としてどの程度選択されているかをまとめたのが表1である。表1をもとに学年別に各場面での選択率を比較してまとめたのが表2である。この表から、具体的場面②は他の選択場面より有意に多く学級内友人が選択され、逆に抽象的な場面①は学級内友人が選択される割合が有意に低いことが認められた。この傾向は小学4年、中学1年に共通してみられた。しかし同じ具体的な選択場面である③は②より

表1 同一学級内友人の選択数および選択比率の比較

( )内は選択総数, 下段は選択比率

	中1 A	中1 B	中1 C	中1 D	小4 A	小4 B
場面 1	73(121) 60.3	71(104) 68.3	29(61) 47.5	57(86) 66.3	75(118) 63.6	78(120) 65.0
2	107(121) 88.4	90(100) 90.0	50(66) 75.8	75(88) 85.2	95(111) 85.6	105(117) 89.7
3	92(124) 74.2	90(113) 79.6	50(75) 66.7	68(91) 74.7	74(119) 62.2	93(120) 77.5
4	74(109) 67.9	59(81) 72.8	24(39) 61.5	61(85) 71.8	64(95) 67.4	93(111) 83.8
5	70(83) 84.3	51(70) 72.9	44(63) 69.8	49(86) 57.0	91(104) 87.5	108(110) 96.4

  

	小4 C	小4 D	小4 E	小4 F	中 1	小 4
1	88(127) 69.3	63(96) 65.6	90(131) 68.7	90(122) 73.8	230(372) 61.8	484(714) 67.8
2	101(127) 79.5	81(90) 90.0	98(130) 75.4	114(123) 92.7	322(375) 85.9	594(698) 85.1
3	90(129) 69.8	73(110) 66.4	93(131) 71.0	105(123) 85.4	300(403) 74.4	528(732) 72.1
4	95(126) 75.4	67(81) 82.7	97(129) 75.2	100(123) 81.3	218(314) 69.4	516(665) 77.6
5	112(128) 87.5	83(95) 87.4	121(127) 95.3	94(123) 76.4	214(302) 70.9	609(687) 88.6

も学級内の友人の選択率は低いことが見られた。場面③と④を比較すると、小学4年では④の方が有意に高いが中学1年では有意な差は得られなかった。排斥場面⑤については、小学4年は他のどの選択場面よりも有意に多く同一学級内の友人を選んでいるのに対して、中学1年は場面①よりは⑤の方が学級内から選択される割合は高いものの、小学4年ほど明らかな傾

表2. 各場面における学級内友人の選択率の比較 (1df)

場 面	中 学 1 年		小 学 4 年	
	$\chi^2$ 値		$\chi^2$ 値	
① 対 ②	53.15***	① < ②	58.57***	① < ②
① 対 ③	14.24***	① < ③	3.25 $\Delta$	(① < ③)
① 対 ④	4.31*	① < ④	16.65***	① < ④
② 対 ③	15.83***	② > ③	35.55***	② > ③
② 対 ④	27.26***	② > ④	12.73***	② > ④
③ 対 ④	N. S.		5.30*	③ < ④
① 対 ⑤	6.89*	① < ⑤	88.74***	① < ⑤
② 対 ⑤	22.84***	② > ⑤	3.83 $\Delta$	(② < ⑤)
③ 対 ⑤	N. S.		60.64***	③ < ⑤
④ 対 ⑤	N. S.		29.47***	④ < ⑤

表中の危険率 \*\*\*P < .001, \*\*P < .01, \*P < .05,  $\Delta$ P < .10

N. S. 有意差なし

以下の表中の記号はすべて表2に準ずる

向は認められなかった。

そこで表1をもとにして中学1年と小学4年の同一学級内の友人の選択率を場面ごとに比較したのが表3である。抽象的な選択場面①と④と排斥場面⑤では、学級内の友人を選択排斥する傾向は小学4年の方が中学1年よりも多く認められた。具体的場面②と③では学年による差は見られなかった。

表3. 学級内友人選択率の学年別比較 (1df)

場 面	$\chi^2$ 値	
①	3.87*	中 < 小
②	N. S.	
③	N. S.	
④	7.56**	中 < 小
⑤	47.48***	中 < 小

## 2. 学級外友人の分類および比較

どういふ友人が学級外から選択されているかを検討するために、学級外友人を便宜上次のように分類した。同じ学校の同学年, 上級生, 下級生, 異なる学校の同学年, 上級生, 下級生, 学年不明の場合は, 近所の人, 親戚及び兄弟姉妹である。これを学年別に各場面ごとにまとめたのが表4で

( )内は%

表4. 各場面における学級外友人の分類

学年 場面	中 学 1 年					小 学 4 年				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
同学年	92(58.2)	48(82.8)	87(69.6)	61(58.1)	76(86.4)	102(41.0)	52(41.6)	84(35.3)	72(44.4)	33(42.3)
同校 上級生	7(4.4)	3(5.2)	4(3.2)	5(4.8)	10(11.4)	51(20.5)	29(23.2)	43(18.1)	31(19.1)	26(33.3)
同校 下級生	0	0	0	0	0	16(6.4)	6(4.8)	40(16.8)	23(14.2)	15(19.2)
他校 同学年	32(20.3)	2(3.4)	4(3.2)	21(20.0)	1(1.1)	22(8.8)	3(2.4)	8(3.4)	7(4.3)	0
他校 上級生	5(3.2)	0	1(0.8)	2(1.9)	1(1.1)	28(11.2)	10(8.0)	25(10.5)	12(7.4)	3(3.8)
他校 下級生	5(3.2)	0	6(4.8)	6(5.7)	0	8(3.2)	3(2.4)	2(0.8)	3(1.9)	0
近 所	13(8.2)	4(6.9)	21(16.8)	6(5.7)	0	15(6.0)	12(9.6)	25(10.5)	12(7.4)	0
親 戚	4(2.5)	1(1.7)	2(1.6)	3(2.9)	0	6(2.4)	6(4.8)	7(2.9)	2(1.2)	0
兄 弟	0	0	0	1(1.0)	0	1(0.4)	4(3.2)	3(1.3)	0	0
姉 妹	1(0.6)	0	1(0.8)	1(1.0)	0	2(0.8)	1(0.8)	1(0.4)	0	1(1.3)
他										
同 学 年	124(78.5)	50(86.2)	91(72.8)	82(78.1)	77(87.5)	124(49.8)	55(44.0)	92(38.7)	79(48.8)	33(42.3)
上 級 生	12(7.6)	3(5.2)	5(4.0)	7(6.7)	11(12.5)	79(31.7)	39(31.2)	68(28.6)	43(26.5)	29(37.2)
下 級 生	5(3.2)	0	6(4.8)	6(5.7)	0	24(9.6)	9(7.2)	42(17.6)	26(16.0)	15(19.2)
同 校 生	99(62.7)	51(87.9)	91(72.8)	66(62.9)	86(97.7)	169(67.9)	87(69.6)	167(70.2)	126(77.8)	74(94.9)
他 校 生	42(26.6)	2(3.4)	11(8.8)	29(27.6)	2(2.3)	58(23.3)	16(12.8)	35(14.7)	22(13.6)	3(3.8)
計	158	58	125	105	88	249	125	238	162	78

ある。この表から、学年を問わずにすべての場面で同じ学校の同学年から友人が選択排斥されている割合が多い傾向が得られた。しかしそれ以外の友人の選択のされ方は学年によっても場面によっても異なるので、中学1年と小学4年の学級外友人の選択率を比較して表5にまとめた。この結果

表5. 学級外友人の選択率の学年別比較 (1df)  $\chi^2$  値

比較 場面	同 学 年		同 校 同 学 年		他 校 同 学 年	
	①	33.41***	中>小	11.55***	中>小	10.95***
②	28.86***	中>小	27.08***	中>小	N. S.	
③	38.22***	中>小	38.71***	中>小	N. S.	
④	22.89***	中>小	4.75*	中>小	16.68***	中>小
⑤	37.78***	中>小	35.60***	中>小	N. S.	

  

比較 場面	同 校		上 級 生		下 級 生	
	①	N. S.		32.43***	中<小	5.18*
②	7.18**	中>小	13.74***	中<小	2.99 $\Delta$	(中<小)
③	N. S.		32.35***	中<小	10.70**	中<小
④	7.02**	中<小	16.54***	中<小	5.51*	中<小
⑤	N. S.		13.77***	中<小	16.34***	中<小

いずれの場面でも、中学1年は小学4年よりも同学年の友人を多く選択排斥していて、特に同じ学校の同じ学年から友人を多く選択排斥している傾向が見られた。また、具体的な選択場面である②③については、中学1年は同じ学校の同学年の友人を多く選択しているのに対して、抽象的場面である①④では同じ学校の同学年ばかりで

なく、他の学校の同学年からも友人を選択している傾向が得られた(表4, 表5, 表6参照)。しかしこの傾向は小学4年には見られず、小学4年は場面にかかわらずほぼ同じ割合で同じ学校の同学年から友人を選択して

表6. 中学1年における同校同学年友人の選択率の比較

場 面	$\chi^2$ 値	
①対②	11.19***	①<②
①対③	3.88*	①<③
②対④	10.26**	②>④
③対④	3.29 $\Delta$	(③>④)

いて、他の学校の同学年の友人を選択することは少ない傾向が見られた。

そこで次に他の学年から友人を選択する傾向を検討してみる。小学4年は学級外の友人のうち40%位は他の学年から選択しているのに対して、中学1年は10%弱であった。特に小学4年の場合は、学級内の友人の選択率は中学1年より高いにもかかわらず、学級外友人としては同年令集団ばかりでなく、他の学年、特に上級生から友人を選択しているという対比が示された。

他の学校から友人を選択する割合を比較してみると、中学1年では抽象的場面①④で他校から友人を選択していて、ほとんどが同じ学年からであった。具体的場面②③では中学1年は他校生を友人として選択することは少なかった。これに反して小学4年は中学1年よりも具体的場面でも他校から友人を多く選択しており、それ以外にも近所、親戚などの中からも友人を選択していることが見られた。

排斥場面については、中学1年、小学4年ともほとんど同じ学校から排斥者を選出していて、他の学校や近所から排斥する傾向はほとんど見られなかった。

### 3. 社会測定的地位と準拠型との関連

社会測定的地位は、便宜上選択排斥を受けたもののうち、中央値より高いものを上、低いものを中とし、選択排斥を受けなかったものを下とした。準拠型は古畑・向井（1975）の様式で分類したが、各型の頻数の関係から、親型、家族型、親と友人型、家族と友人型、友人型、その他の6類型にまとめた。なお現実水準と期待水準の2水準における準拠型と社会測定的地位との関連を比較し表7にまとめた。結果はごく一部を除いては、準拠型と社会測定的地位との間に有意な関係は見出されなかった。小学4年は親や家族に準拠していても社会測定的地位に差はなく、また中学1年で友人に準拠している者でも一貫して社会測定的地位が高いという傾向は見られなかった。



表7. 各場面における準拠型と社会測定的地位との関係

(注) 準拠型の分類様式 (A: 父, B: 母, C: 兄弟, D: 姉妹, E: 親友)  
 □ 家族型 ABC, ABD, AC, AD, BC, BD, C, D, CD    △ 親と友人型 AE, BE, ABE  
 ○ 家族と友人型 ACE, ADE, BCE, BDE, CE, DE, CDE    ☆ 友人型 E    〽 その他

場面	1			2			3			4			5		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
小4・現実水準	30(32.6)	27(22.1)	10(27.8)	36(30.3)	23(23.5)	8(24.2)	27(27.8)	31(25.6)	9(28.1)	31(32.0)	26(21.9)	10(32.3)	24(30.4)	16(22.2)	27(27.5)
口	24(26.1)	33(27.0)	12(33.3)	31(26.1)	25(25.5)	13(39.4)	30(30.6)	31(25.6)	8(25.0)	27(27.9)	33(27.0)	9(29.0)	20(25.8)	14(19.4)	35(35.4)
ハ	21(22.8)	41(33.6)	8(22.2)	30(25.2)	31(31.6)	9(27.3)	23(23.5)	37(30.6)	10(31.3)	24(24.7)	35(29.5)	10(32.3)	26(32.9)	20(27.8)	24(24.2)
ニ	9(9.8)	7(5.7)	0	9(7.6)	7(7.1)	0	12(12.2)	3(2.5)	1(3.1)	8(8.2)	8(6.6)	0	2(2.5)	7(9.7)	7(7.1)
ホ	1(1.1)	1(0.8)	1(2.8)	0	3(3.1)	0	0	2(1.7)	1(3.1)	0	3(2.5)	0	1(1.3)	1(1.4)	1(1.0)
ヘ	7(7.6)	13(10.7)	5(13.9)	13(10.9)	9(9.2)	3(9.1)	5(5.1)	17(14.0)	3(9.4)	7(7.2)	16(13.1)	2(6.5)	6(7.6)	14(19.4)	5(5.1)
計	92	122	36	119	98	33	97	121	32	97	122	31	79	72	99
小4・期待水準	31(33.7)	34(27.9)	12(33.3)	42(35.3)	26(26.5)	9(27.3)	30(30.9)	31(25.6)	14(43.8)	33(34.0)	31(25.4)	13(41.9)	27(34.2)	19(26.4)	31(31.3)
口	14(15.2)	17(13.9)	5(13.9)	18(15.1)	13(13.3)	5(15.2)	17(17.5)	19(15.7)	1(3.1)	12(12.4)	21(17.2)	3(9.7)	6(8.3)	13(18.1)	17(17.2)
ハ	22(23.9)	31(25.4)	13(35.1)	25(21.0)	29(29.6)	12(36.4)	22(22.7)	34(28.1)	10(31.3)	22(22.7)	33(27.0)	11(35.5)	24(30.4)	17(23.6)	25(25.3)
ニ	1(1.1)	13(9.8)	0	3(2.5)	10(10.2)	0	7(7.2)	6(5.0)	0	5(5.2)	8(6.6)	0	2(2.5)	3(4.2)	8(8.1)
ホ	5(5.4)	4(3.3)	1(2.8)	6(5.0)	2(2.0)	2(6.1)	5(5.2)	3(2.5)	2(6.3)	3(3.1)	7(5.7)	0	3(3.8)	3(4.2)	4(4.0)
ヘ	13(20.7)	24(19.7)	5(13.9)	25(21.0)	18(18.4)	5(15.2)	16(16.5)	28(23.1)	5(15.6)	22(22.7)	22(18.0)	4(12.9)	17(21.5)	17(23.6)	14(14.1)
計	92	122	36	119	98	33	97	121	32	97	122	31	79	72	99
中1・現実水準	2(3.0)	3(5.4)	2(7.1)	1(1.8)	4(6.3)	2(6.7)	1(1.8)	5(6.8)	1(4.8)	1(1.8)	3(5.0)	3(8.8)	1(2.7)	2(5.4)	4(5.2)
口	5(7.5)	7(12.5)	1(3.6)	6(10.5)	7(10.9)	0	6(10.5)	6(8.2)	1(4.8)	4(7.0)	9(15.0)	0	4(10.8)	2(5.4)	7(9.1)
ハ	29(43.3)	22(39.3)	11(39.3)	22(38.6)	28(43.8)	12(40.0)	21(36.8)	31(42.5)	10(47.6)	26(45.6)	20(33.3)	16(47.1)	12(32.4)	12(32.4)	38(49.4)
ニ	9(13.4)	9(16.1)	8(28.6)	9(15.8)	12(18.8)	5(16.7)	8(14.0)	14(19.2)	4(19.0)	8(14.0)	14(23.3)	4(11.8)	10(27.0)	6(16.2)	10(13.0)
ホ	13(19.4)	8(14.3)	4(14.3)	9(15.8)	9(14.1)	7(23.3)	14(24.6)	8(11.0)	3(14.3)	10(17.5)	6(10.0)	9(26.5)	9(24.3)	8(21.6)	8(10.4)
ヘ	9(13.4)	7(12.5)	2(7.1)	10(17.5)	4(6.3)	4(13.3)	7(12.3)	9(12.3)	2(9.5)	8(14.0)	8(13.3)	2(5.9)	1(2.7)	7(18.9)	10(13.0)
計	67	56	28	57	64	30	57	73	21	57	60	34	37	37	77
中1・期待水準	5(7.5)	4(7.1)	1(3.6)	2(3.5)	6(9.4)	2(6.7)	3(5.3)	5(6.8)	2(9.5)	3(5.3)	4(6.7)	3(8.8)	1(2.7)	4(10.8)	5(6.5)
口	6(9.0)	6(10.7)	2(7.1)	5(8.8)	7(10.9)	2(6.7)	6(10.5)	8(8.2)	2(9.5)	6(10.5)	5(8.3)	3(8.8)	3(8.1)	4(10.8)	7(9.1)
ハ	21(31.3)	20(35.7)	10(35.7)	16(28.1)	23(35.9)	12(40.0)	17(29.8)	28(38.4)	6(28.6)	19(33.3)	18(30.0)	14(41.2)	11(29.7)	13(35.1)	27(35.1)
ニ	4(6.0)	6(10.7)	4(14.3)	7(12.3)	6(9.4)	1(3.3)	5(8.8)	7(9.6)	1(4.8)	6(10.5)	7(11.7)	1(2.9)	6(16.2)	1(2.7)	7(9.1)
ホ	9(13.4)	6(16.7)	5(17.9)	8(14.0)	6(9.4)	6(20.0)	10(17.5)	6(8.2)	4(19.0)	9(15.8)	7(11.7)	4(11.8)	7(18.9)	2(5.4)	11(14.3)
ヘ	22(32.8)	14(25.0)	6(21.4)	19(33.3)	16(25.0)	7(23.3)	16(28.1)	21(28.8)	6(28.6)	14(24.6)	19(31.7)	9(26.5)	9(24.3)	13(35.1)	20(26.0)
計	67	56	28	57	64	30	57	73	21	57	60	34	37	37	77

考察：本研究の調査時期は2月であり、学級が編成されてからかなりの時間が経っているにもかかわらず、準拠人としての友人の約2/3は同級生から選択されており、具体的場面では更に高い割合で同級生が選択されていることが認められた。しかし学年によって選択のしかたが異なることも示された。

いわゆる児童期型の交友関係と青年期型の交友関係の相違は多くの文献で指摘されているところであるが（桂他，1969），本研究からもその相違をうかがうことができたと考えられる。即ち小学4年では学級内の友人の選択率が高い一方、学級外の友人としては同学年はもとより、上級生、近所の人の中からも様々な場面で友人が選択されていることが見出されたことから、家族や地域や学級集団との結びつきがうかがえる。一方中学1年は学級内の友人選択率が具体的場面では小学4年と差がないが、抽象的場面では小学4年より有意に少なく、同学年から友人を選択している割合が高いことが示された。しかも中学1年は全体としてみれば小学4年よりも同じ学校の同学年から友人を選択する割合が高いが、抽象的場面ではこの他にも他校の同学年生からも友人を選択する割合が高いことが認められた。このことは小学4年の場合は、設定された場面の相違に応じて友人を選択し分けるというよりはむしろ、仲の良い人はどの場面でも友人として選択しやすい傾向を反映したものと考えられる。従って特定の仲よしと同級生の中にいない時には、その子供をとりまく他の状況上の特定人物（上級生や近所の子供など）が準拠人としての性格を与えられやすいことになるのであろう。一方中学1年は、場面に応じて友人を選択し分けていることがうかがわれると共に、同輩集団としての同年令群の持つ意義が強まってきたことがうかがわれる。

社会測定的地位と準拠型との関係については一貫した関係が得られなかった。問題点としては、社会測定的地位を便宜上同一学級内の被選択数から決定したことがあげられる。もし準拠人としての友人が上述したような選択のされ方をするならば、特定集団での社会測定的地位は低くても友人

に準拠していることもありうる。また、小学4年の場合は同級生からの選択に基いて社会測定的地位を算出したところで、その同級生に対して心理的な結びつきが強いとは限らず、いわば表層的な結びつきが社会測定的地位に反映しているのかもしれない。実際表7からもうかがえるように、小学4年では社会測定的地位にかかわりなく親や家族に準拠している者が多いことから、この方法の問題点が指摘される。いわゆる青年期に入ると、ソシオメトリックテストで示される選択行動と実際の生活上の心理的準拠とは対応関係をもってくることが予想されるので、この点については中学1年ばかりでなく、青年中期、青年後期の年齢集団を調査もることによって問題点が明らかになってくるだろう。

## (その2) 交友選択にみられる対人態度と、準拠人及び道德判断の類似性

**目的：**従来の研究は、相手との態度や考え方が類似していることによって好意性が強められることを指摘している。特に態度の類似性と好意性の関連に関しては、Berscheid & Walster (1969) も指摘しているように、態度の類似性が好意性に寄与する効果は大きい。この点については強化説 (Byrne, 1971 他) とバランス説 (Newcomb, 1961 他) の2側面から比較的的重点的に検討されてきており (瀬谷, 1977)、近年この2説の発展的統合も望まれてきている (長田, 1977)。また多くの研究が刺激人物に対する評価の形をとっているので、刺激人物と相互作用をすることもない実験的統制下では、日常的な社会的相互作用の面が欠落するという指摘もなされている (長田, 1977)。態度以外にも性格の類似性に関しては多くの研究がなされ、中里他 (1975) によれば、外向性の類似性との関連及び養護欲求の類似性との関連が指摘されている。この他にも能力や経済的水準、人種などの類似性と好意性の関連についても研究がなされている (詳しくは長田, 1977 参照)。本研究はこれらの点をふまえて実際に選択排斥関係にある2者間の準拠型の類似性及び道德判断反応の類似性を検討すること

を目的としている。

#### 方法：

- 1) 調査対象：イ 埼玉県 I 市 F 小学校 6 年男子 49 名女子 46 名計 95 名，  
                  ロ 東京都 M 市 I 小学校 4 年男子 21 名女子 18 名計 39 名
- 2) 調査時：イは 1974 年 3 月，ロは 1974 年 4 月
- 3) 調査の内容：i) 筆者らの作成した準拠集団調査（古畑・向井，1975，58—59 頁参照）のうち「現実水準」に関する 10 の設問 ii) 同じく筆者らの試作した道徳性テスト 16 場面のうち，部分的に改訂して選出した 10 場面に対する 4 肢選択反応 iii) 選択 2 問と排斥 1 問を含む交友関係調査（次の 3 問から成り各 3 名記入させる。） 場面 1—何でもうちあけて相談できる友達；場面 2—一緒に遊んだり勉強したりする友達； 3—一緒に話をしたり，遊んだりしたくない友達（その 1 の調査用紙と同様の教示を与えた。）
- 4) 施行手続：筆者らが校長，担任教諭に趣意，施行要領を説明の上，担任教諭を通じて施行した。同一被験者に上記の 3 種の調査を同時に施行した。

#### 結果：

1. 第 1 位に選択（排斥）された人について
  - 1) 第 1 位に選択（排斥）された人とそれを選択（排斥）した人との関係  
交友関係調査で第 1 位に選択（排斥）された人とそれを選択（排斥）した人とをペアにして以下の分析を行なった。まず準拠人の選択傾向について比較した。このペアが準拠人選択行動を行なう 10 場面中何場面で 2 者が一致して同一対象を選択していたかを取り，その一致数の中央値以上と以下のペアの数を表 8 に示した。また一致した準拠対象はどういう対象であるかをみるために，親，家族，友人にまとめて同時に表 8 に記載した。この一致数を場面別に比較した結果を表 9 に示した。この結果，選択場面

表 8. 各場面における準拠人・道徳判断一致数

	学 年	4 年			6 年		
		場面			場面		
		1	2	3	1	2	3
I-(1) 準拠人の一致数	4 以上	6	14	5	17	17	8
	3 以下	6	5	9	6	9	18
I-(2) 親を準拠対象とする場合	5 以上	6	11	2	13	15	16
	4 以下	6	8	12	10	11	10
I-(3) 家族を準拠対象とする場合	7 以上	9	14	11	4	5	15
	6 以下	3	5	3	19	21	11
I-(4) 友人を準拠対象とする場合	1 以上	0	3	1	20	20	7
	0	12	16	13	3	6	19
II 道徳判断反応の一致数	5 以上	7	11	4	12	13	12
	4 以下	5	8	10	11	13	14

表 9. 表 8 の場面間の比較 ( $\chi^2$  値, 1df)

学 年	4 年			6 年		
	場面比			場面比		
	1 対 2	1 対 3	2 対 3	1 対 2	1 対 3	2 対 3
I-(1)	N. S.	N. S.	3.33 $\Delta$	N. S.	9.09**	6.24*
I-(2)	N. S.	N. S.	10.24***	N. S.	N. S.	N. S.
I-(3)	N. S.	N. S.	N. S.	N. S.	8.35**	8.13**
I-(4)	N. S.	N. S.	N. S.	N. S.	15.44***	13.02***
II	N. S.	N. S.	N. S.	N. S.	N. S.	N. S.

1 と 2 の間には、第 1 位に選択された人と選択した人との間での準拠人の選択傾向の一致数に差は見られないが、選択場面のペア間の一致数と排斥場面の 2 者間の一致数を比較すると有意な差が見出された。

まず小学6年では、選択場面の方が排斥場面よりも有意に多く準拠人の選択傾向が一致しており、特に友人が準拠人として選択される場合にこの傾向は顕著に見られた。これに対して排斥場面では第1位に排斥された人と排斥した人との間では準拠人の一致数は少なく、特に友人を準拠人とする場合の一致数は0のペアが多い傾向がみられた。親を準拠対象とする場合には場面間の差はなく、全体にやや一致数が多い傾向がみられたが、家族を準拠対象とする場合には、選択場面では第1位に選択された人と選択した人との一致数が有意に低く、第1位に排斥された人と排斥した人との一致数が多い傾向がみられた。

次に小学4年では、6年のように準拠人の一致数が選択関係にある2者間と排斥関係にある2者間の間で明確な差を示すことは少なかった。親を準拠対象とする場合のみ、場面2の選択関係にある2者の方が、場面3の排斥関係にある2者よりも有意に多く一致していることが示された。特に4年では友人を準拠対象として選択する割合が少ないので、選択関係にある2者間でも一致することは少ないことが示された。

このように準拠人の選択傾向は学年によって異なるので、これを比較して表10にまとめた。選択関係にある2者間についてみると、準拠人の一致数には学年による差は見られないが、準拠人として友人を選択する場合の一致数は6年の方が4年より有意に多いことが見られた。また親を準拠対象とする場合の一致数には学年差は見られないが、家族を準拠対象として選択する場合の一致数は、4年の方が有意に多いことが示された。排斥関

表10. 表8の学年間の比較 ( $\chi^2$  値, 1df)

場 面	I—(1)	I—(2)	I—(3)	I—(4)	II
1	N. S.	N. S.	8.88**	20.93***	N. S.
2	N. S.	N. S.	13.34***	14.06***	N. S.
3	N. S.	3.82△	N. S.	N. S.	N. S.

係にある2者(場面3)については、このような学年差はなく、一貫して準拠人の一致数が少なく、家族を準拠対象とする場合の一致数が多く、友人を準拠対象とする場合の一致数が少ないという傾向が得られた。

道徳判断反応については、10場面中何場面で両者が一致しているかをとり、その中央値5場面以上で一致した場合と4場面以下で一致した場合のペア数をまとめて、表8のⅡに示した。場面間の比較(表9)、学年間の比較(表10)をみてもわかるように、4年、6年とも選択関係にある2者と排斥関係にある2者との道徳判断反応の一致数や学年による差はともに見られなかった。

2) 第1位に選択(排斥)された人の準拠対象の類型

第1位に選択(排斥)された人の準拠対象の類型を古畑・向井(1975, 79頁参照)の基準で分類してみると、単独の対象への集中型は少なく、混合型を示していることが多かった。そこで表11のように友人を主とする類

表11. 第1位に選択・排斥された人の準拠対象の類型

(イ：友人を中心，ロ：親を中心)

		学 年					
		4 年			6 年		
場 面		1	2	3	1	2	3
		イ	① 友人型・友人との混合型	12	17	5	19
② 他	0		2	9	4	6	19
ロ	③ 親 型	3	11	3	2	5	3
	④ 親と友人型	0	2	2	19	18	4
	⑤ 家 族 型	4	4	6	1	0	16
	⑥ 他	5	2	3	1	3	3

型(イ)と、親を主とする類型(ロ)のように同じ資料を2つの観点からまとめてみた。これを場面間で比較したのが表12である。

この表12から、第1位に選択された人の準拠対象の類型は、第1位で排

表12. 表11の場面間の比較 ( $\chi^2$  値, 1df)

学 年 場 面	4 年			6 年		
	1対2	1対3	2対3	1対2	1対3	2対3
イ—①	N. S.	9.13**	8.20**	N. S.	13.41***	13.02***
ロ—③	N. S.	N. S.	3.02 $\Delta$	N. S.	N. S.	N. S.
ロ—④	N. S.	N. S.	N. S.	N. S.	19.53***	13.32***
ロ—⑤	N. S.	N. S.	N. S.	N. S.	15.18***	20.31***

斥された人に比べて、友人型もしくは友人との混合型が多く、この傾向は4年、6年ともに示された。一方親を準拠対象として選択する場合には、6年では親だけを準拠対象として選択する場合には選択された人と排斥された人との間に有意な差はみられないが、親と友人との混合型は、第1位で選択されている人に多く見られ、親と兄弟との混合型は排斥されている人に多く見られた。6年で得られたこの傾向は4年では得られなかった。

### 3) 第1位に選択・排斥された人の道徳判断反応の類型について

道徳判断反応の類型は、A：自己欲求充足型、B：他者志向型、C：規範遵守型、D：合理的現実的他人愛型の4類型を示す4肢選択肢から選択することで決定された（古畑・向井・明田，1977，93—94頁参照）が、ここでも単独型は少ないので、AやBの反応を含む類型とそれ以外の類型とに大別して表13のようにまとめた。

表13. 第1位に選択・排斥された人の道徳判断反応の類型

学 年 場 面	4 年			6 年		
	1	2	3	1	2	3
A・Bを含む類型	4	7	6	15	16	10
A・Bを含まない類型	8	12	8	8	10	16



この結果6年では第1位に選択された人にAやBを含む類型が多く、第1位に排斥された人はその逆である傾向がみられたが統計的に有意な傾向ではなかった。4年では選択された人、排斥された人にかかわらずAやBを含む類型を示す人が少ない傾向がみられたが統計的には有意でなかった。また、各場面別に学年間の比較をしたところ、どの場面でも学年差は認められず、上述の傾向もそれほど明らかなものではないといえよう。

## 2. 社会測定的地位の上位群と下位群による準拠型及び道德判断反応の比較

社会測定的地位は、同一学級内における被選択数が上位  $\frac{1}{4}$  にあたる上位群と、下位  $\frac{1}{4}$  にあたる下位群と、その中間の中位群にわけられた。

(その1)と同様に同一の準拠対象を10場面中何場面で選択しているかを比較してみると、6年では友人を選択する場合のみ上位群の方が多いう傾向がみられたが ( $U=10.5$ ,  $P < .05$ )、他の対象に対しては社会測定的地位による差はみられなかった。4年では兄弟の選択数のみ下位群の方が多かった ( $U=8.5$ ,  $P < .05$ )。ここでも(その1)と同様に、社会測定的地位と準拠型との間の明確な関係は得られなかった。

道德判断反応と社会測定的地位との関連も、4年、6年ともに明確な関係は得られなかった。

### 考察：

交友関係調査で第1位に選択された人とその人を選択した人との間にみられる準拠対象選択傾向は、第1位に排斥された人と排斥した人との間にみられるそれとは有意に異なっていて、前者は後者よりも各場面で同一の対象を選択する傾向がみられた。準拠対象を選択する傾向は学年によって異なり、6年は4年より多く友人に準拠していることが示された。友人を準拠対象として選択する際は、選択関係にある2者間の方が有意に多く一致していた。これと対比して、親とか兄弟など家族に準拠する傾向は4年に多く見られ、選択関係にある2者と排斥関係にある2者との間に差は見

られないが、6年では排斥関係にある2者の方が一致数が多かった。この結果からみて、友人を準拠対象として選択している人は、他者からも友人として選択されやすく、これが好意性を規定する一つの要因ではないかと考えられる。

社会測定的地位と準拠人選択傾向との関連については明らかな関係はみられなかったが、6年において、地位の高い者の中に友人を準拠対象として選択する傾向がみられ、家族に準拠している者には地位による差がみられないことから、友人に準拠している者が友達として選択されやすいことを裏づけていると考えられる。

道徳判断反応の類似性の問題については、選択関係にある2者間と排斥関係にある2者間の間での類似性の差異はみられず、社会測定的地位との関連も明らかではなかった。この結果から、このような道徳判断の設問状況では、道徳判断に関する指標が対人関係の好意性を規定する要因をとらえるのに適していなかったのではないかと考えられる。またこの種の調査には、被験者の知識や社会的望ましさなどの変数が反映されやすいので、調査結果をそのまま道徳性の発達をとらえる指標にすることに対しても問題が残る。この点に関しては、被験者の日常生活に密接に関係した、より具体的な行動のレベルで道徳性の問題を吟味しなければならないであろう。

### 全体の考察及び今後の問題

筆者らは交友関係調査や準拠集団調査に対して被調査者の示した反応から、その対象を準拠人であると仮定している。しかしここで得られた結果をみても、同じように友人が選択されていても、単に表層的な関係を示しているのかもしれないが、この判別は容易ではない。このことはいわば選択者の認知領域の問題であり、調査に示された対象がそのまま準拠人とみなしうるかは別である。従って正確には準拠人として仮定される対象といった方がよいかもしれない。

準拠人として仮定される友人は、同級生以外にも同学年はもとより他の

学校からも選択されていることを示した結果は、従来の交友関係調査が主として同一学級内からの選択排斥を扱っている点に対して新しい視点を与えるのではないかと思われる。とりわけ友人を準拠対象とするようになった年齢段階で、より日常的な場面よりも抽象的な場面において、同じ学校内の他の学級から友人がかなり選択されているという事実は、交友関係の質を問題にする時に重要な示唆を与えるであろう。もしこの論が妥当ならば、学級内の選択排斥関係からその学級における社会測定的地位をもとめて、集団に対する適応を問題にするような方法（田中，1967，1970）も再考しなければならないかもしれない。

次に、対人関係の好意性を支える要因の一つに、2者間の種々の類似性の問題がある。この点に関して、友人を準拠対象とするような年齢段階になると、選択者と被選択者の準拠型が類似してくることが示され、逆に排斥関係にある2者間での類似性は低いことが示された。従って交友関係調査における選択排斥行動の基礎に、このような準拠人の類似性があることがうかがえる。この類似性が、単なる遊び友達以上の2者間の相互信頼へと発展させていくのではないだろうか。

道德性に関しては2つの問題点がある。1つは前述したように測定具自体の問題であり、より日常生活に密着した行動レベルで道德性の発達をとらえられるような方法が工夫されなければならない。もう1つの点は、道德判断反応の類似性が好意性の規定因になりうるかという点にある。確かに準拠人の判断枠は準拠している人にとっての行動の指針となりうるであろうが、そうだからといって道德判断反応の類似性が2者相互の好意性の増大につながるであろうか。つまり準拠人の判断を受容するという関係によって、準拠している人の道德性の発達に及ぼす効果は十分に考えられても、当事者間の好意性の発展にどのようにかかわってくるかについては、今のところ明らかではない。

## 引用文献

- Berscheid, E. & Walster, E. H. (1969) *Interpersonal attraction*. Reading, Mass.: Addison-Wesley.
- Byrne, D. (1971) *The attraction paradigm*. New York: Academic Press.
- 古畑和孝・深見敦子・播磨美智子 (1972) 準拠対象としての友人の選択範囲の一分析——準拠集団と道德性の発達 (第2報告)——「日本教育心理学会第14回総会発表論文集」180—181頁
- 古畑和孝・向井敦子 (1975) 準拠集団と道德性の発達 (第1報告) 子どもの準拠人 国際基督教大学学報 I—A「教育研究」, 18, 55—93頁
- 古畑和孝・向井敦子・明田芳久 (1977) 準拠集団と道德性の発達 (第2報告) 国際基督教大学学報 I—A「教育研究」, 20, 91—139頁
- 桂広介・園原太郎・波多野完治・山下俊郎・依田新監修 (1969) 「児童心理学講座 7, 社会的発達」金子書房
- 向井敦子・古畑和孝・明田芳久 (1974) 準拠集団と道德性の発達 (第4報告) (その2) 交友選択にみられる対人態度と, 準拠対象及び道德判断の類似性との関連「日本教育心理学会第16回総会発表論文集」, 284—285頁
- 中里浩明・井上徹・田中国夫 (1975) 人格類似性と対人魅力一向性と欲求の次元—「心理学研究」, 46, 109—117頁
- Newcomb, T. M. (1961) *The acquaintance process*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Newcomb, T. M., Turner, R. H. & Converse, P. E. (1965) *Social psychology: the study of human interaction*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- ニューカム・ターナー・コンヴァース (古畑和孝訳) (1973) 「社会心理学: 人間の相互作用の研究」岩波書店
- 長田雅善 (1977) 親和性と好意性 水原泰介編「講座社会心理学1 個人の行動」東京大学出版会 91—129頁
- 瀬谷正敏 (1977) 「対人関係の心理」八木晃監修「現代の心理学5」培風館
- 鈴木正義 (1969) 交友関係の発達 桂広介他監修「児童心理学講座7 社会的発達」149—181頁
- 田中熊次郎 (1967) 「増訂ソシオメトリーの理論と方法」明治図書
- 田中熊次郎 (1970) 「ソシオメトリー入門」明治図書新書

## Reference Groups and Moral Development (III)

1. Bounds of friend selection
2. Similarity between interpersonal attraction and reference person or moral judgement

Atsuko Mukai and Kazutaka Furuhata

This is one of the study concerning reference groups and moral development.

In the first part, the bounds of friend selection as a reference person was analysed. The objects were 250 fourth graders of elementary school and 151 first year students of junior high school. As the result of sociometric test, it was found that concerning the fourth graders, their friend selection rates among the Classmates was found high. While there was quite a variety of their selection outside their class. About the first year students of junior high school, when they think about the situations of playing or studying, rate of their selection among the classmates appeared high. However, when they consult their personal problems, this rate was rather low. In such cases they tended to choose their friends among those of their same age.

In the second part, the relationship between interpersonal attraction and similarity was analysed. The objects were 39 fourth graders and 95 sixth graders. The questionnaire for reference person, moral development test and sociometric test were used. Two kinds of selection pairs were set up. The first was the pair between the selector and his most preferred friend. The second was the pair between the selector and his least preferred friend. Comparing these two pairs, the first tended to choose the same

reference person. When the friend was regarded as the reference person, this tendency was accurately seen in the sixth graders. When the family was the reference group, there was not clear difference between the first and second pairs in the fourth graders. However, the second pairs of the sixth graders was selected more often their family as the reference group.

Concerning the moral judgement, there was not clear relationship between similarity and attraction.

It was discussed that those who select friends as reference persons were tended to be chosen as friends by others. As the same time, the similarity of the reference person might be the significant factor of interpersonal attraction.